

平成29年度 学校経営計画及び学校評価

1. めざす学校像

私たちの学校は、YMCAの正章に掲げる Spirit(精神)・Mind(知性)・Body(身体)のバランスを保ち、未来に希望を持ちチェンジメーカーとなる(=社会をよりよく変えていく)青年を育むための、自由で解(ひら)かれた学校であることを目指している。そのために「命の尊厳」を教育目標とし、次の4つを教育目的とする。

1. 自分のペースで自分らしく学び、学ぶ楽しさを知ることから自分の中にある可能性を見つける。(学び)
2. 自分の将来に夢と希望を持って歩む進路を見つけ、目標に向かって進む力を身につける。(進路)
3. グローバルな視点に立って物事を考え、世界の平和を創り出す人材を育てる。(グローバル)
4. イエス・キリストの愛と希望の生き方に学び、一人ひとりの尊厳を認め、互いの存在を大切にし、信頼しあえる人間を育む。(自尊心)

2. 中期的目標(平成27~29年度)

1. 学びの基礎を身につける

(1) スクーリング内容の充実

- ・数年来見られた生徒層の変化に拍車がかかり、他者とのつながり、関わりに「悩んでいる生徒」「課題がある生徒」「つながり、関わりを求める生徒」が多く見られるようになった。その中で、できるだけ学校に通う環境を作るために「Yチャレンジクラス」「マイスペースクラス」「グローバルクラス」「アドバンストクラス」を設置し、それぞれのクラスにおいて教科のスクーリングを充実させると共に、「人間関係トレーニング」や「コミュニケーション」と言った科目を設置し、クラス内での人間関係を育み、他者との関係性について学び体験する取り組みを充実させる。
- ・「最も大切な、生徒とのコミュニケーションの場」として、講師にも必要な生徒情報を共有し、スクーリングの進め方について、一人ひとりに寄り添いながら学習を進められるように働きかける。
- ・生徒が自発的かつ積極的に学習に向かうために、より興味・関心を持てるスクーリングとするための基盤を確立する。

(2) 学力定着のサポート

- ・Yチャレンジコースや4つのクラス(マイスペース・アドバンスト・グローバル・ウエルネス)中心に、一人ひとりにあった学びなおしができるようにサポートを充実させる。
- ・ICTを活用し、一人ひとりの学習習熟度を把握できるシステムを構築する。

2. 生徒一人ひとりに添った進路支援

(1) 個人の課題に対応するキャリア支援の充実

- ・生徒一人ひとりの長所を生かした進路実現ができるように、適切な時期に保護者・生徒と面談を実施する。
- ・多様化し刻々と変化する進路状況について、各大学・短大・専門学校・企業や進路研究会・進路情報企業から情報を適切に収集し、保護者・生徒にとって適切な情報を提供する。

(2) 自己実現可能な支援と環境の整備

- ・生徒へのよりよい指導や支援ができるよう「担任力」をあげるため、研修や情報共有を行う。
- ・学校通信で学校行事やボランティア案内の掲載を増やし、生徒が積極的に取り組めるように支援する。

3. グローバルな視野を持つ人材の育成

(1) YMCAの特徴を活かした海外交流プログラムの充実

- ・YMCAのネットワークを通して海外の学生と交流する機会を提供し、海外の文化に興味を持ち、グローバルな視点に立って物事を考える機会を持つ。

(2) 海外交流の素地となるコミュニケーション力を身につける

- ・総合選択科目における多文化共生系列などのスクーリングや特別活動を通して、自分の考えを相手に伝え、相手の思いを受け止めるコミュニケーション力を身につける機会を提供する。

4. 生徒・教職員に寄り添う教育環境の整備

(1) 生徒一人ひとり関わる環境を整える

- ・入学時に下記の「3つの約束」を生徒と交わすことで生徒の学校への帰属意識を高める。
 - 1)自分を大切にします
 - 2)自分と同じように周りの人を大切にします
 - 3)自分の学びをあきらめず、自ら学ぶ姿勢を大切にします
- ・生徒支援部会、特別支援教育コーディネーターを中心に生徒の状況を把握し、適切なフォローができるようにする。

(2) ICT並びに情報提供環境整備と充実

- ・今後の探求型授業に生かしていくことができるようにICT技術を随時導入する。
- ・Yラーニング(PCやタブレットからアクセス可能な学び直しができるシステム)の受講比率アップに取り組む。代替教材としてパルステップ

<p>もあわせて検討する。</p> <p>(3) 学校運営責任者の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2022年の学習指導要領改訂に向けて、高校として取り組むべき課題を抽出し、実行するリーダーシップを養う。 ・教科会議の設置に向けて各教科におけるカリキュラム研究、授業研究を進める。
--

【教職員自己評価の結果と分析・学校評価委員会からの意見】

教職員自己評価の結果と分析〔平成30年4月実施分〕	学校評価委員会からの意見
<p>1. 学びの基礎を身につける</p> <p>学習習慣が定着するように、各科目のレポート内容や学習内容について引き続き修正を行ってきた。実際、問3「各科目の学習計画が生徒の学力に応じて適切に作成されている」での肯定的評価が平成28年度40.0%→29年度61.5%に伸びている。前年度より12.9ポイント下がり、基礎学力が十分身につけていない生徒への対応に苦慮していることが見られた昨年度から比べ、まだ改善の余地はあるとはいえ、教職員の間でも意識が高まり、生徒の学力に沿ったレポートや学習計画の作成が実践できている状況にあると考えられる。</p> <p>また、問32「学習指導において、生徒の実態に合わせた指導方法の工夫・改善を行っている」においても、平成28年度75.0%→29年度92.3%と大幅な伸びを示していることから、「学びをあきらめず、学び直しができる学校」であることが教職員間でも共通認識となったと言える。今年度から開始したYチャレンジコースや「学び直し」の授業を軸にして、幅広い学力層の生徒に対応できる学校となるよう整備していきたい。</p> <p>平成34年の学習指導要領改訂に向けて、体験型学習・探究型学習を取り入れた授業を増やすべく取り組んでいるが、問35「効果的な校内研修計画を立案し、教職員に実施している」での肯定的評価は平成28年度44.0%→29年度46.2%、問34「教員間で授業内容を評価、意見交換などを行う機会がある」については平成28年度22.2%→29年度30.8%と依然低いままである。教育効果のある魅力的な授業に近づけるよう、教職員研修の実施や教員間の連携をより進めていく必要がある。</p> <p>2. 一人ひとりに添った進路を見つける</p> <p>昨年より設置した4つのクラス（マイスペース・アドバンスト・グローバル・ウェルネス）に加え、週5日制のYチャレンジコースを今年度より設置したことで、生徒の興味関心を伸ばして将来につなげる学校の体制が整いつつある。実際、問33「生徒一人ひとりの興味・関心・適性に応じた進路選択ができるような支援体制がある」では平成27年度94.1%→28年度66.7%と下がっていた評価が、29年度は76.9%と上昇傾向にある。今後、さらに良質な教育内容となるようカリキュラムの整備を行い、一人でも多くの生徒が主体的に進路を考え、切り開いていくことができるようにしていきたい。</p> <p>一方、本校の強みである、YMCAネットワークを活用したボランティア活動の機会を充実することに関しては、問23「ボランティア活動は活発に行われている」の肯定的評価が、平成28年度70.0%→29年度61.5%であった。環境を生かしている状況とは言えず、生徒自身が社会で必要とされているという実感を持ち、自己肯定感の向上や自己実現に向けても大きなきっかけとなることからボランティア活動をより推進し、生徒一が参加しやすい状況を作ることが急務である。</p> <p>3. グローバルな視野を持つ人材の育成</p> <p>卒業後グローバル社会の中に出ていくにあたり、相手を理解しようとする姿勢を持ち、つたなくても自分の考えを相手に伝える努力をし、そして願わくは自分自身が平和を創る人間であってほしいことを本校の活動で体感できることを目指している。</p> <p>今年も香港台湾グローバルシチズンシップスタディツアー・グローバルユースカンファレンスといった海外研修プログラムを実施するとともに、アジア学院の研修受け入れ、韓国語サークル発足など海外に行かなくても交流ができる場を設けることができた。またグローバルクラスでは外部施設の訪問やゲストスピーカーの招聘を積極的に行った。そのため、問26「他国の歴史・文化の理解、異文化交流など国際理解に対する教育活動を</p>	<p>【第1回 5月21日(月)】主に生徒・保護者アンケートについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 昨年から、研修や会議においてスクールミッション（教育方針）を教職員全体で確認する機会を意識的に持ったことで、教職員全体の意識が変わり、また生徒の間にも本校のスクールミッションが浸透してきたと感じる。 ○ 一昨年からはまった4つのクラスは順調に進んでおり、生徒の帰属意識向上にも貢献している。また昨年度から開始したYチャレンジコースも順調に生徒を集めている。選択した生徒にとっては、今後の進路にも大きな影響を与えるものと想像されるため、一層のカリキュラムの充実を図ってほしい。 ○ 学び直しが軌道に乗ってきた一方で、学力の高い層への支援も必要なタイミングに来ているのではないかと。教職員だけではすべての学力層へのサポートをカバーできないので、外部の教育ツールの導入を考えてもよいのではないかと。 ○ 例年協議されているレポートの見直しについては、まだ改善の余地があるようである。統一したレベルのレポートを使うことが必須なのであれば、学力別に応じた補助教材を作成し、学力定着を図るようにはどうか。学校としてしっかりとの方針を打ち出すことが必要であり、それはスクーリングの内容やレベル設定についても同様である。 ○ 教員により指導力やクラス運営の力にばらつきがあるのではないかと。ホームルームや面談の仕方がある程度マニュアル化していく必要があり、そのことによって教員の担任力の向上、ひいては生徒・保護者の満足度向上につながると思われる。 ○ 保護者アンケートの項目13「学校行事」14「スクーリングの学習効果」15「基礎的な学力を身につける指導」16「学習サポート」については他の項目と比べ否定的評価が目立って多い。この部分の不満の原因を探ることが必要。特に15は学び直しに関する項目で、生徒の評価は高い。保護者に学校が行っている学び直しの取組をもっと周知するべきではないかと。 ○ 学校に対する満足度は、生徒・保護者とも一定の評価を得ている。今後、否定的評価が目立つ項目の原因を探ることが必要である。 <p>【第2回 6月11日(月)】主に生徒・保護者アンケートについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒支援に関する項目は、カウンセラーの配置や臨床心理士の常駐など、他校にはない支援が充実しているため例年高評価である。そのことを広報面でも伝えるよう工夫をし、安定した学校運営のためにより多くの生徒・保護者から興味を持ってもらうようにしなければいけない。 ○ 生徒や保護者への情報伝達に改善の余地が大きくある。学校からの郵送物である「学校通信」以外にもよりダイレクトに情報を伝えられる工夫が急務である。 ○ 進路支援について、生徒・保護者は一定の評価をしているが、中には進路への意識が低い担任もいる。今年度進路支援の在り方を大幅に見直しているとのことなので、改善を期待している。 <p>【第3回 7月9日(月)】主に教職員自己評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 国際理解や人権教育に対する評価が上昇した一方、地域交流や情報公開は下降している。特にホームページの活用状況の評価の下降が目立つ。改善への取り組みが期待される。 ○ 環境教育の項目は前年度に比べ評価が上がっている。校舎移転の影響ではないかと。ただ、校舎移転に伴い当初計画していた開講講座の種類のス

取り入れている」の肯定的評価は平成 28 年度 70.0%→29 年度 84.6%と上昇した。今後も、総合学科の特色を活かし、グローバルな視野を持つ人材の育成に力を注いでいく。

4. 生徒・教職員に寄り添う教育環境の整備

昨年度から引き続きスクールミッション（学校の使命と教育方針）について確認する機会を教職員と定期的に持ち、常にミッションに立ち返り教育活動をしていく姿勢を伝えてきた。また生徒と共有する「3つの約束」を設置、浸透してきたことも、教職員へのスクールミッションの浸透により影響があると考えられる。

問 1「スクールミッションがよく浸透している」では、肯定的評価が昨年度まで平成 26 年度 62.5%→27 年度 76.5%→28 年度 90.0%と順調に伸びてきた。29 年度は昨年度まで 0%であった「よくあてはまる」が 23.1%と高い伸びであった反面、肯定的評価は 84.6%と 5.1%減少した。これはスクールミッションを意識する機会の少ない教職員がいることの影響であると考えられる。今まで同様、ミッションに立ち返る機会を多く持つとともに、教職員研修を実施するなどし、スクールミッションのより一層の浸透に取り組むことが必要である。

生徒や保護者に寄り添った学校となっているかについては、問 29「生徒指導において保護者との連携ができていく」の肯定的評価が平成 28 年度 55.6%→29 年度 84.6%と大幅な伸びであった。教職員が保護者との連携を意識して行い、それが実現できているという認識を持つことができていく。問 31「カウンセリングマインドを取り入れた支援体制がある」は平成 28 年度 88.8%→29 年度 84.6%と微減ではあったが、引き続き担任をはじめとした生徒・保護者への支援体制を強化していきたい。

一方で生徒・保護者への情報共有には課題を残す結果となった。問 11「学校の諸活動について、学校通信・学校新聞を利用していねいに報告している」では平成 28 年度 90%だった肯定的評価が、29 年度は 76.9%とであった。従来からの学校通信での情報共有に加え、近年はインターネットやフェイスブックでの情報共有を始めているが、まだまだ不十分な現状であることを反映した数値であり、次年度以降特に力を入れなければいけない項目である。

教職員については、チームで取り組む場面や課題を設定したり、教員間や教科間の連携を促したりといったことに取り組んできた。そのため問 4「教員間教科間の相互理解がなされ、信頼関係に基づいて教育活動が行われている」での肯定的評価は平成 28 年度 40.0%→29 年度 69.2%と大幅に改善した。しかし不登校や発達に課題を持った生徒が増えている今、よりよい教育環境とするために取り組むべき余地はまだ大きいと認識している。

リム化は実現できていない。まず一つ一つの講座の充実を図るため、開講講座の種類を絞ることが必要ではないか。

○ 財務状況に関する項目で他の項目と比べて低い評価が目立つ。財務状況について教職員全体への説明、共有が必要ではないか。

○ 教員研修の項目はいずれも他と比べて低い評価が目立つ。講師会で研修を実施したり、特に今年度はグループワークを取り入れたことは評価できるが、さらなる教員研修の実施が求められる。特に教科面での取組みが不十分であると思われる。「わかる授業」「魅力のある授業」実現のために、主要教科全教科で教科会を行えるための準備をするべきである。

○ 高校を取り巻く環境が大きく変わる中、生き残りをかけて学校改革に取り組まなければいけない。本校のコンセプトを確認した上で、次期学習指導要領改訂までに取り組むべき課題について協議し、共有することが大切である。

【第 4 回 8 月 31 日(木)】取り組むべき課題について

○ 今の在籍生の中にも日本語が母語でない生徒や複数の言語で育ってきた生徒がいる。地域の中学校にもそういった多様な言語背景を持つ生徒や外国籍の生徒が増えていることから、日本語指導のスクーリングを開講してはどうか。

○ e-ポートフォリオの導入に伴い、生徒自身が積極的にボランティア等の課外活動に取り組む機会をより提供する必要がある。参加者を増やすためにも情報発信と周知に力を注ぐ。また、e-ポートフォリオでは確立されたシステムでの学校運営がより求められるようになっている。システムの選別が必要である。

3. 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取り組み計画	評価指標	自己評価
1. 学びの基礎を身につける	(ア) 学び直しと仲間づくりを実現する環境を作る。	(ア) 週5日通学し、学び直しを中心としたYチャレンジコースを設置。その他の生徒にも学び直しのスクーリングを設置、Yラーニングと合わせて、学び直しを推進する。	(ア) 生徒アンケート項目「スクーリングではわかりやすい学習指導をしていた」、及び保護者アンケート項目「基礎的な学力を身につけさせる指導がなされていた」・「学校の学習サポートは充実していた」	(ア) 生徒アンケート項目の肯定的評価は28年度83.8%→29年度87.0%、保護者は81.7%→77.8%であった。(△) ⇒保護者からの評価が下がっているため、より学びなおしに関する達成度の共有と報告を充実させることが必要である。また生徒のアンケート項目が必ずしも学びなおしに直結した項目ではないので変更する。
	(イ) レポート内容を見直し、できるだけ生徒の学習レベルにあった内容にする。	(イ) レポートは教科ごとのレベルのばらつきをなくすよう留意する。	(イ) 生徒アンケート項目「レポートの難しさは適切だった」	(イ) 肯定的評価は28年度85.0%→29年度84.9%と横ばいであった。(○) ⇒次年度以降も引き続きレポート内容の充実を図っていく。2022年度教科書改訂に向けて、レポート内容の吟味も2019年度から行う。
	(ウ) 体験型学習を多くの場面で取り入れる。	(ウ) 「人間関係トレーニング」「コミュニケーション」「ホームルーム」を中心にペアワークやグループワークを通してアクティブラーニングの機会を増やす。	(ウ) 生徒アンケート項目「他の学校にない特色ある科目について満足していた」	(ウ) 肯定的評価は28年度80.4%→29年度83.3%であった。(○) ⇒他校にない左記のような授業が評価されていると言える。次年度はより体験型学習の評価が分かるようなアンケート項目としたい。 <u>※学び直しに関する教育内容及び環境の充実に力を入れる必要がある。他校にない特徴ある授業は本校の魅力の一つとなっているので更なる充実を図る。</u>
2. 一人ひとりに添った進路を見つける	(ア) 適切な時期に面談を行い、一人ひとりにふさわしい進路を実現する。	(ア) Yチャレンジコースおよび4つのクラス中心に保護者と連携をとり進路実現をめざす。	(ア)(イ) 生徒および保護者アンケート項目「学校は進路について適切な相談や情報提供ができていた」	(ア)(イ) 生徒アンケート項目の肯定的評価は28年度83.8%→29年度83.1%、保護者85.3%→86.5%であった。(○) ⇒どちらもほぼ横ばいであった。次年度以降も引き続き充実を図っていく。
	(イ) 進路・就職ガイダンスを定期的実施し、適切な進路支援情報を提供する。	(イ) 大学・専門学校の担当者に来校してもらい、説明・体験を行って参加者数を伸ばす。		
	(ウ) ボランティア活動に関する情報を積極的に提供し、参加をうながす。	(ウ) ボランティア活動に関する情報を年度初めに提供、また毎月の学校通信にも記載し、年間を通して参加する機会を増やす。	(ウ) 生徒アンケート項目「ボランティア活動の情報も豊富で参加しやすいものであった」	(ウ) 肯定的評価は28年度66.9%→29年度68.9%であった。(○) ⇒微増はしているが他の項目に比べて数値が低いので、より情報提供に力を入れてボランティアに参加しやすい環境を作る。ボランティア活動は多数あるが、生徒自身が学校説明会やチャリティーマラソン大会等でのサポートをボランティアと意識していないことも考えられる。また保護者アンケートにも同様の指標を次年度は入れるようにする。 <u>※進路面談やガイダンスに力を入れることはもちろん、生徒の進路に間接的に影響するボランティア活動や課外活動の充実を図る。また学校通信以外にも一斉メール等の方法で情報共有に工夫をする。</u>

<p style="text-align: center;">∞ グローバルな視野を持つ人材の育成</p>	<p>(ア) Y M C A のネットワークを最大限に活かし、海外交流をする機会を提供する。</p> <p>(イ) グローバルクラスのカリキュラムをより充実させる。</p>	<p>(ア) 香港台湾グローバルシチズンキャンプ・グローバルユースカンファレンス・カナダ短期語学留学といった海外研修プログラムを実施する。またアジア学院の研修受け入れなど海外に行かなくても交流ができる場を設ける。</p> <p>(イ) 英語コミュニケーション力を身につけるため、外国人講師によるスクーリング、グローバルカフェを実施する。また「国際平和セミナー」の授業で外部施設の訪問やゲストスピーカーの招聘を行う。</p>	<p>(ア) 生徒アンケート項目「イベントなどを通して地域の方々と交流する機会は充実していると思う。」</p> <p>(イ) 生徒アンケート項目「他の学校にない特色ある科目について満足していた」</p>	<p>(ア) 肯定的評価は 28 年度 59.9%→29 年度 63.9%であった。(○) ⇒微増はしているが他の項目に比べて数値が低いので、より海外プログラムに充実を図る必要がある。今年度は韓国語サークルが発足、途中から毎回 Y M C A の留学生も参加することになり今後の充実も期待できる。また専門学校高等課程の国際交流クラブとの交流行事も実現した。</p> <p>(イ) 肯定的評価は 28 年度 80.4%→29 年度 83.3%であった。(○) ⇒グローバルクラスの所属人数が増えていることからクラス在籍生は内容に満足していることがうかがえる。</p> <p><u>※この項目は Y M C A の国内外のネットワークを活かして評価を高めることができる分野であるので、次年度以降より内容の充実に努める。</u></p>
<p style="text-align: center;">▶ 生徒・教職員に寄り添う教育環境の整備</p>	<p>(ア) 生徒が主体的に学ぶに向かう環境を作るため、守るべき 3 つの約束を制定。学校全体で一人を大切に、学びを諦めないという方向性を打ち出す。</p> <p>(イ) 生徒や保護者により寄り添った学校となるため、カウンセリング体制を強化する。</p> <p>(ウ) 講師への生徒情報共有を適宜行い、生徒一人ひとりに寄り添う体制づくりの強化に努める。</p> <p>(エ) 生徒一人ひとりが学びやすいよう、また教員がよりわかりやすい授業ができるよう ICT 環境を整える。</p>	<p>(ア) 入学時に下記の 3 つの約束を生徒と確認し、ホームルームでも頻繁に確認する。また教職員もそのサポートをするという姿勢を示す。</p> <p>(イ) 生徒支援アドバイザーやカウンセラーの存在に加え、特別支援教育の体制も整える。</p> <p>(ウ) 講師会の開催回数を増やす(年度末)。講師会においてよりよい学校づくりのための話し合いの場を持つ。</p> <p>(エ) プロジェクターや I T 教室を使った授業を勧めるとともに、ipad の導入も検討する。</p>	<p>(ア) 生徒および保護者アンケート項目「学校の理念・方針を理解していた」</p> <p>(イ) 生徒アンケート項目「いつでも相談できる場所や人の環境が整っていた」、及び保護者アンケート「学校は生徒の悩みや相談について適切に対応していた」</p> <p>(ウ) 保護者アンケート項目「教員はお子様に親身に適切に対応していた」</p> <p>(エ) 生徒および保護者アンケート項目「校内の設備や施設は充実していた」</p>	<p>(ア) 生徒の肯定的評価は、28 年度 77.1%→29 年度 81.4%、保護者は 28 年度 93.2%→29 年度 93.0%であった。(○) ⇒入学時から一貫して「3 つの約束」で学校が大切にしていることを訴えた効果が出ている。</p> <p>(イ) 生徒の肯定的評価は 28 年度 85.0%→29 年度 86.6%、保護者は 28 年度 89.3%→86.8%であった。(○) ⇒本校の特色の大きな柱でもあるので、担任への研修を行うなどしてより高い評価を目指したい。特別支援教育コーディネーターを次年度配置予定。</p> <p>(ウ) 肯定的評価は 28 年度 96.2%→91.9%であった。(△) ⇒昨年がかなりの高評価だったこともあるが、より全教員一体となったサポートができるよう情報共有を心掛けていきたい。</p> <p>(エ) 生徒の肯定的評価は 28 年度 89.1%→82.4%、保護者は 28 年度 91.1%→80.2%であった。(×) ⇒カウンセリングに代表される生徒支援事項に比べ、施設・設備面では改善が必要である。特に I T 環境の整備を急ぐ必要がある。</p> <p><u>※スクールミッションの浸透により、生徒の帰属意識は高まっている。プールも設置されていた前校舎からの移転により、全体がコンパクトになったための評価とみている。今後は施設設備面を充実させ、今まで以上に良質な教育環境を整える。</u></p>